ENDOJI SHOTENGAI

商店街のウチ・ソトの人を巻き込みながら、
この街の日常と歴史ある街並みを未来へ。

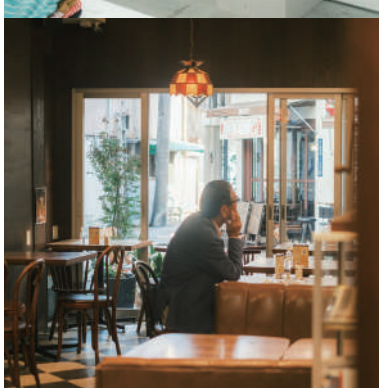
円頓寺商店街

「名古屋駅」から北東へ。今やイベントや人気店で賑わう円頓寺商店街にも、数知れぬ苦労がありました。大切にし続けたのは、『まちの日常を残し、本来の魅力を損なわない』こと。商店街内外の人を巻き込みながら、空き店舗一軒一軒に試行錯誤を重ねてきた歴史を紐解きました。

愛知県名古屋市西区那古野一丁目 周辺

事例集は「あいち商店街空き店舗情報ナビ」でもご覧いただけます

発行：愛知県経済産業局中小企業部商業流通課／企画：株式会社ナゴノダナバンク



1700 元禄の大火

大火の後、蔵が建ち道幅が広がり四間道ができる。

1725 圓頓寺、現在の地に再建

前年の享保の大火で延焼、圓頓寺（えんどんじ）は現在の地に再建、門前町が発展。

堀川に架かる五条橋横船着場を利用する船乗りや商人も立ち寄った

1928 円頓寺発展会

大正時代に発足された「親睦会」が「円頓寺発展会」として改組される。

堀川は名古屋城築城の際運送の要として作られた

1956 第１回「円頓寺七夕まつり」開催

瀬戸電の急行が大津町駅止まりとなり、瀬戸方面からの客足が減少。この頃から映画館、遊園地、盛り場として各横丁を含めたまちづくりの計画と促進運動が始まる。

（写真提供：化粧品のフジタ）

1964 アーケード完成

ショッピングモール化を目指し、２度目のチャレンジで設置にいたる。

（写真提供：化粧品のフジタ）

1986 名古屋市町並み保存地区指定

土蔵や長屋の残る「四間道（しけみち）」が名古屋市町並み保存地区に指定される。

2004 第１回「ごえん市」開催

毎月第1日曜日に開催されるフリーマーケット

2005 ターニングポイント

情報誌ポゥ第１号発行

円頓寺の３つの商店街と四間道界隈の情報をまとめたフリーマガジン発行。

制作は円頓寺を拠点にする女性３人。年２回の発行で15年続け、2020年に30号で終刊

商店街の掃除から始め、既存イベント「ごえん市」参加、自主イベント立上げとさまざまな活動が生まれた

2007 ターニングポイント

那古野下町衆発足

商店街の人、建築家、大学の先生、コンサルなどが集まり、四間道や那古野エリアを面で広く捉えて発展させていこうと発足された団体。通称「那古衆」。

2009 取組成果

那古野地区店舗開発協議会
ナゴノダナバンク設立

那古衆の空き店舗対策プロジェクトを本格始動するために設立。那古衆の中からナゴノダナバンクを立ち上げた市原さんが自ら空き店舗を購入し、ギャラリーショップ「galerie P+EN」を出店。隣の空き店舗にも声を掛け、知り合いの水野さんがスペイン食堂「BAR DUFI」を開店。

1軒開いては1軒閉まる状況で、店の数はなかなか増えず、2003年前後が衰退の底。2012年頃には店舗数としては最低の24軒まで落ち込んだ

波及効果 店舗オープン

現理事長の田尾さんのお店！

- ギャラリーショップgalerie P+EN（2010）
- スペイン食堂BAR DUFI（2010）
- 喫茶、食堂、民宿。なごのや /地域商業自立促進事業（2015）
- 那古野ハウス（ゲストハウス、ボルダリングジム）/地域商業自立促進事業（2018）
- わざもん茶屋（名古屋伝統工芸職人のお店）/地域文化資源活用空間創出事業（2018）
- アーバンワイナリーcommone /地域商業機能複合化推進事業（2022）

他約40軒

2013 波及効果 イベント実施

第１回「円頓寺秋のパリ祭」開催

発起人は、BAR DUFIオーナー！

2015 アーケード改修

アーケード対策委員は、商店街理事、那古衆のメンバーから構成され、ソーラーパネル設置など特色あるアーケードに生まれ変わった

2020年ECサイト「円頓寺オンライン商店街」開設。2022年産学官連携による人流・行動データや属性データ等の収集と「AIラボ」開設、2023年DX化による商店街の活性化に取組む円頓寺商店街マイレージプログラム「円頓寺友の会アプリ」の開設と新しい取組みにチャレンジしている

2018 取組成果

ナゴノダナバンク法人化

ナゴノダナバンク設立から法人化を経た現在まで、円頓寺商店街を中心に那古野エリアで約40軒を誘致。その他、四間道の古民家長屋を改修する「まちなみ保全プロジェクト」、高知県フェア「エリアジャック高知＠なごの」など。まちづくりの活動が評価され、名古屋市の商店街商業機能再生モデル事業「ナゴヤ商店街オープン」アドバイザーや、愛知県を飛び出し陸前高田や大阪へと活動の幅を広げている。

今後の課題

- 新店舗に置き換わって歴史的な街並みが変わってしまうことは避けたい
- 事業継承をどう考えているかなどデリケートな問題に向き合う必要性がある
- まちが変化しても昔から住んでいる人たちの日常生活は担保していく

上向きの勢いをコントロールすることが難しい中でも、このまちを守る意識が大切！

那古野下町衆（なごやしたまちしゅう）
通称：那古衆

2007年に結成。商店街の人たちの他、建築家や大学教員、大学生、コンサルタントなど、地域に愛着を持つウチ・ソトの人が集まり、円頓寺商店街や円頓寺本町商店街のみならず四間道や那古野（なごの）エリア全体を発展させようと発足した地域主体のまちづくり団体です。商店街の掃除に始まり、イベントの企画や運営など、人と場所を広げる多様な活動が生まれました。その活動のひとつであった空き店舗対策チームは、まちづくり会社ナゴノダナバンクを設立し、現在は空き家活用やイベントの企画運営、他地域のまちづくりも行い、那古野エリアとの地域間連携にも積極的に取り組んでいます。

寂れかけた商店街に、失われた昭和の原風景を見出して

＞＞市原さん
私の地元は円頓寺、大須と並ぶ名古屋の三大商店街のひとつ、大曽根商店街です。大曽根は名古屋市による再開発が早くから行われて、いち早くアーケードを取り払い、いわゆるおしゃれな感じのショッピングストリートに作り替えられました。どこの商店街も郊外の大型商業施設に押されて衰退してきた頃だったので、地元の商店主さんたちにとっては、再開発によってお客さんが戻ってきてもう一度繁盛するんじゃないかと、期待があったけれど、単純に美しく作り替えられたところに人が戻ることはありませんでした。一時的に商店街はにぎわいを取り戻したが、10年もしないうちに閑散としてしまい、再開発の失敗例として全国から視察がやってくるような状況になっていました。そんな頃、円頓寺にやって来たら、古い、ノスタルジックな昭和の風景や花街の風情が残っていて、僕にとっては懐かしさを味わいながらお酒が飲める場所として、気に入ってよく通うようになりました。空き店舗に関わりを持ち出したのは2003年頃。ここにギャラリーがあったら面白いなと思い、空いていたベビー用品店を貸してもらえないかと相談し、一旦話がまとまったものの、翌日にやっぱり貸せないと言われました。聞いてみると、近所の人に話したら、家を騙し取られるからやめておけとアドバイスされたと（笑）。僕は純粋にこの街は面白い、魅力があるから借りたいと思ったけれど、当時の円頓寺はどんどん店が閉まって人通りもなく、こんなところで新しく何かをやりたいなんて、裏があると怪しまれたんでしょうね。それならと、七夕まつりの期間だけ空き店舗を貸してもらって、急ごしらえのギャラリーをつくり、アートを展示しながらワインが飲める場所を一時的にオープンしました。

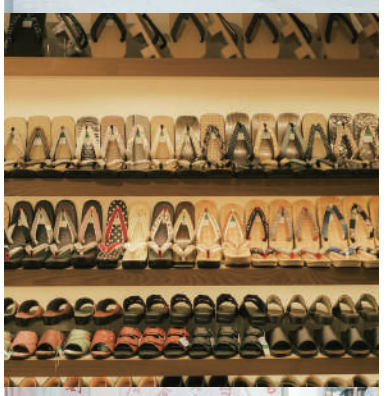
＞＞高木さん
そのときのギャラリーにも足を運び、一緒にワインを飲みましたね。私は明治から５代続く履物店「野田仙」の跡取りですが、あの頃は商店街全体が下向きというか、活気を失っていて、なんとかしないとこのまま終わってしまいそうな空気を感じていました。円頓寺界隈で店を営む女性３人で、円頓寺の３つの商店街と四間道界隈の情報をまとめたフリーマガジン「ポゥ」を始めたのも、外の人に知ってもらいたい意味もありますが、堀川があって花街の歴史もある、自分たちが商売している街はこんなにいいところなんだと、地元の人に自信を取り戻してほしいという思いが強くありました。せっかくこのエリアをフィールドに雑誌をつくるんだからと、円頓寺や本町、四間道の人だけではなく、いろんな人を巻き込もうということで、建築家の市原さんや大学の先生たち、西区のプロジェクトを手掛けていたコンサルタントなどに声をかけて月に一度飲みながら話をするようになりました。そこで結成したのが、「那古野下町衆（＝那古衆」です。

自分が生まれ育ったまちで
失われたものがここにあった

市原正人さん
有限会社デロ（市原建築設計事務所）代表
株式会社ナゴノダナバンク代表
一般社団法人ポンド代表

地元の人に、もう一度
自信を取り戻してもらいたかった

高木麻里さん
履物「野田仙」店主で前理事長



那古野のまちに愛着を持つ人の集い、那古野下町衆

＞市原さん

那古衆のみんなで大阪の空掘商店街を視察に訪れた際に、商店街再生のために空き店舗を借り上げ、新たな出店者を仲介するなど、孤軍奮闘する建築家の姿を見て、誰かが大きくペダルを踏まないと物事は進んでいかないと学びました。それで早速取り掛かったのが、空き店舗の情報を集めて、マッチングにつなげるためのデータベースづくりですが、これはすぐに頓挫しました。古い商店街だけに、建物のオーナーと、そこを使っている人や住んでいる人がバラバラで、一軒ずつそれぞれの事情があり、権利関係も非常に複雑。データベースのフォーマットを作ったところで、書ける内容がひとつもない。こういう空き店舗がある、と情報をオープンにして広く募集するのは無理だと認識して、一軒一軒、具体的な事情に合わせて出店者を一本釣りすることになりました。初めは那古衆の中の１プロジェクトとしてスタートした空き店舗対策ですが、2009年にまちづくり会社ナゴノダナバンクを設立し、本格的に空き家・空き店舗の活用に乗り出します。ちょうど売りに出た空き店舗があり、小さな木造の２階建てで、価格的にもなんとか手が届く物件だったので自ら購入し、リノベーションを施して、商店街の一角にギャラリーを兼ねたセレクトショップを構えました。その頃は、とくに土日は夕陽が射したら涙が出そうなくらいの黄昏感が漂う人通りのなさ。１軒だけポツリと営業しても寂しいので、隣にはぜひ知り合いの店に来てもらおうと、まだ貸してくれるともなんとも言ってないお隣の空き店舗に、出店者を探しました。声を掛けたほぼ全員に断られたものの、唯一捕まえたのが、現在も隣り合わせで営業してくれているスペイン食堂の水野さんです。フランス好きの彼は、のちに「パリ祭」の発起人になってくれました。空き店舗はもともと鞄屋さんで、２階におばあちゃんが住んでいましたが、店舗と住居スペースを完全に分離することが可能だったので、貸してもらえることになりました。おかげでほぼ同時に２軒並んでオープンしたことで、再生の息吹が感じられるものができて、メディアの取材もかなり来てくれました。おばあちゃんも元々商売が好きな人で、まるで自分の店のように可愛がってくれて、スペイン食堂がオープンする際には粗品で配るタオルを自分で作ってくれました。店が開いてからは、テラスでコーヒーを飲みながら新聞を読み、うちの店でも「高いわぁ」と言いながら服を買ってくれるなど、昔ながらの人情味が当たり前のようにあるのが、円頓寺のあたたかいところ。私も新しい店を誘致するだけでなく、その後の関係性をつなぐ役割を果たさなくていけないと教えてもらいました。

残すべきものをきちんと守ってこそ、魅力ある街並ができる

＞＞高木さん

当時は１軒開いては１軒閉まる感じで、新しい店が開いても減っていくスピードに抗えず、なかなか増えてはくれなかったですね。そんな頃、ある新聞記者さんに「いろんな商店街を見てきましたが、この街はまだ生きています、だから頑張ってください」と言われました。思いを持つ人がいることがとても大切で、円頓寺はまだ大丈夫だと。そんな言葉にも励まされて、理事長として10年間なんとか走り切り、アーケード改修後のいろいろも片付いた2018年に、次の世代にバトンを渡せました。

＞＞市原さん

年に３軒のペースで空き家・空き店舗の改修を手掛け続けて、まちの再生が上向きになるまで10年近く掛かりました。店主さんが元気なうちから、将来どうする、事業承継をどう考えているかなど、デリケートな問題に他人が踏み込むことは難しいですが、もう少し早く着手していたら残せたお店もあったかもしれないと思うと、もどかしさを感じる部分もあります。いまは出店希望者が増えて、人気の物件も多くなり、商店街だけでなく四間道など那古野エリア全体がいい意味で変化を続けています。今後の課題としては、この上向きの変化がいつまで続くだろうかというのと、いつまで続けていいのか、というふたつの疑問があります。どんどん店が増えてしまうと、本来の魅力である昔ながらの花街の風情や江戸時代からの歴史ある街並みが失われてしまう危惧もあります。かつて衰退のスピードに抗えなかったのと同じで、いまの状況も誰かがコントロールできるものではなく、勢いを止めることはできませんが、昔から住んでいる人たちが、ちゃんとそこで生活できる日常は担保されるべき。だから元々お店だったところには店舗を誘致して、住宅だったところには新しい住み手をマッチングして、この街の日常の姿を残すことで、本来の魅力を損なわないように気をつけています。こうなったらいいなという理想を言い続けることしかできませんが、言い続けることでみんなが気づいて、もう一度この街を守っていこうという意識が高まってくれたらと思っています。

発行／愛知県経済産業局中小企業部商業流通課
企画・編集・デザイン／株式会社ナゴノダナバンク
藤田まや、市原正人（アドバイス）、髙橋幸大（サポート）
安井加奈子、鈴木真理（テキスト編集）、安達麻未（MAP）
イラスト／大角真子
写真（メイン、コラージュ）／ fujico
対談ライティング／北川裕子

2024 年 2 月発行

掲載情報は 2024 年 2 月時点のものです。